

聖書：ヨハネの黙示録 22：14～17

説教題：渴く者は来なさい

日時：2021年12月5日（朝拝）

ヨハネの黙示録は 22 章 6 節から結びの部分に入りました。ここでは主の再臨の日がいよいよ間近いことを見据えて、このヨハネの黙示録で学んだことを生かし、幸いな道を行くように！と奨励されています。先週見た 7 節に「見よ、わたしはすぐに来る。この書の預言のことばを守る者は幸いである。」とありました。また 10 節に「この書の預言のことばを封じてはなりません。時が近いからです。」とありました。この黙示録のメッセージに接して、すべての人間は 2 種類に分かれることが 11 節で言われました。片方の人間は黙示録のメッセージに聞かず、益々不正を行い、益々汚れた者となる道を進む人々。もう片方の人間は黙示録のメッセージに従い、益々正しいことを行い、益々聖なる者とされる道を行く人々。そしてそれぞれが行き着く最終的な状態が、今日の箇所 14～15 節に対照的に述べられます。

まず 14 節は「自分の衣を洗う者たち」のことです。この表現はすでに 7 章 14 節に出て来ました。そこでは衣を洗った人たちは「子羊の血で白くした」と言われています。神の国に入るには当然きよい者でなければなりません、私たちは自分の努力で自分の罪を洗い流すことはできません。それができる方法はただ一つ、キリストの十字架によって洗うことです。ヨハネの手紙第一 1 章 7 節：「御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。」 イザヤ書 1 章 18 節：「たとえ、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとえ、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」 また、この「洗う」という言葉は現在時制で書かれています。つまり日々洗い続ける。絶えず洗い続けているというニュアンスがあります。私たちは最初にキリストのもとへ行き、罪を告白することを通して、決定的にきよくされる恵みを受けます。しかし地上にある限り、日々私たちは罪を犯します。キリストを信じて理想的な人間になったかと期待しますが、そう簡単ではありません。昨日きよめられたのに、今日また自分を見てがっかりするような人間です。しかし聖書はだからと言って勝手に失望せず、日々キリストのもとに来て罪を告白し、きよくされる恵みにあずかるように！と命じています。ヨハネの手紙第一 1 章 9 節：「もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。」

こうしていつもキリストに信頼し、キリストのもとで自分の衣を洗う人たちに最終的に与えられるのが「いのちの木の実を食べる特権」です。いのちの木は 22 章 2 節に出て来ました。これは創世記 2 章でエデンの園にあったものでしたが、人間が罪によって失ったものでした。アダムとエバはエデンの園から追い出され、もはや二度とこの木に近づき、その実を取って食べる機会は失われたかに思われました。ところが何とそのいのちの木が聖書の一番最後の黙示録 22 章にこうして登場しています。神の都にはそれがたくさんあり、門を通過して都に入る者は、そこから自由に取って食べることができます。そうして神がくださる永遠のいのちを豊かに味わって生きる者とされるのです。

しかしもう一つの対照的な行き先があることが 15 節に記されます。その人々は「外にとどめられ」ます。これはすでに見た 21 章 8 節と同じと思われまます。この報いを刈り取る人たちとして 15 節には 6 つのリストが挙げられていますが、この内の 5 つは 21 章 8 節と同じです。そして 21 章 8 節を見た際に申し上げましたが、これは一般的な悪人というよりも、焦点が当てられているのは名ばかりのクリスチャンたちのようです。教会に出入りし、信仰者である振りをしつつ、迫害や困難が生じると、この世でうまく生き延びるため、皇帝礼拝や偶像礼拝に屈する人たち。この世の流れに乗っかることを優先し、信仰と妥協する人たち。ですから 21 章 8 節ではそれらの人々を指して「臆病な者、不信仰な者」と言われていました。

今日の 15 節のリストは最初の「犬ども」を除いて、今述べた通り、すべて 21 章 8 節に出て来たものと同じです。各地の異教の神殿における偶像礼拝は魔術や性的に淫らな行いと関係していました。ですからそれに屈する人たちとして、ここでも「魔術を行う者、淫らなことを行う者」と言われています。また当時、皇帝礼拝に屈さなかったクリスチャンたちは迫害され、殉教に追いやられました。従って皇帝礼拝に屈する人たちは信者たちを殺す側に加担する「人を殺す者」と呼ばれます。次の「偶像を拜む者」は、そのままの表現です。また「偽りを好み、また行う者」とは、彼らが信仰があると主張しつつ、それと矛盾する生活をしていることを指します。彼らはいくそを言っている人たちということになります。では一つ目の「犬ども」とは何でしょうか。今日、犬はペットとして飼われ、愛されていますが、聖書時代では悪いイメージで考えられていました。通りを吠えながらうろつき回り、ごみ箱から食べ物をあさり、

時には人に向かって来る危険でたちの悪い動物ととらえられていました。マタイの福音書7章6節：「聖なるものを犬に与えてはいけません。」　ピリピ人への手紙3章2節：「犬どもに気をつけなさい。」　ペテロも第二の手紙2章22節：「犬は自分が吐いたものに戻る。」　こうした新約聖書時代の用法を背景として、ここでは状況によって簡単に信仰を否定し、この世に乗っかる偽りのクリスチャンたちを特に指して、彼らはただこの世の肉体的生活だけを考える動物のような存在、犬のような存在だと言っているのでしょう。

その者たちは「外に」とどめられるとあります。これは都に入れないということをお願いしたいのでしょう。21章8節では「火と硫黄の燃える池の中」と言われました。ですからここは単に都の外に住むという意味ではないと思います。都の中に住む者たちとは全く対照的な永遠の災いを刈り取るということです。ですからこの道を行く者とならないように！と黙示録は勧めます。取り返しのつかない将来に至ることがないように！間もなく来られる再臨の主を見据えて黙示録のメッセージに耳を傾け、これが教える幸いに生きる者であるように！と。

さて黙示録はさらに結びにおける結びへと近づきます。16節にはイエス様ご自身のことばが記されます。16節前半：「わたしイエスは御使いを遣わし、諸教会について、これらのことをあなたがたに証した。」　「これらのこと」とは、これまで見て来たヨハネの黙示録全体のことでしょう。ですからこの黙示録はイエス様ご自身が御使いを通し、全世界の諸教会、私たちみなに対して証ししてくださったものであるということです。イエス様はここで「わたしはダビデの根、また子孫」であると仰っています。「ダビデの根」という言葉は5章5節にも出て来ましたが、これはダビデに先立つ方であり、ダビデに勝る方であることを示します。一方、「ダビデの子孫」ともここで言われています。これはイエス様が福音書の中で、パリサイ人たちに対して詩篇110篇1節を引用して、ダビデはキリストを「私の主」と呼んでいるのに、どうしてそのキリストが「ダビデの子」なのかと問われた問いを思い起こさせます。これはイエス様が神であり人であるという神秘に関わるものです。イエス様は確かにダビデから出たダビデの子孫、ダビデの子ですが、ただそういう人間的観点から見ただけではイエス様を正しく理解することはできません。むしろイエス様はダビデに先立つお方、ダビデが主と呼ぶ神なるお方であり、その神である方がご自分を低めてダビデの子孫という人間になってくださった。このようにイエス様は神・人なるお方であるからこそ、

私たちの救いのためにとてつもない力を持つ救い主となることができたのです。

また「輝く明けの明星である」ともあります。これは民数記 24 章 17 節のバラムの預言をもとにしたものです。この明けの明星とは夜明け前に輝く星のことです。つまりこの世はまだ闇が覆っていることをこれは暗示します。しかし明けの明星が見えたということは、間もなくその夜が明けようとする時期に来ている。まだあたりは暗くても、もうすぐ完全な神の栄光の世界が現れ出ようとしている。最終的な夜明けは、もう間もなくなのです。

このイエス様の言葉に対する教会の応答が最後 17 節に記されます。17 節前半：「御霊と花嫁が言う。『来てください。』これを聞く者も『来てください』と言いなさい。」花嫁とはこれまで見て来た通り、教会のことです。イエス様はペンテコステの日に教会に聖霊を注いでくださいました。その聖霊に導かれて歩んで来た教会はここで叫ぶのです。たった今 16 節で愛する主のお声を聞きました。主は「わたしは輝く明けの明星である」と言われ、間もなくご自身が来られることを宣言なさいました。これに聞く教会の第一声は「来てください！」というものであるということです。聖霊はキリストへと私たちの心を向けさせる霊です。その聖霊に導かれ、聖霊とともに、教会は主を待ち焦がれて「来てください」と声を上げるのです。このような祈りが心の発露となって現れ出るのが聖霊に導かれた教会であるということです。

またこれに聞く者も「来てください」と言いなさいと続きます。ここは礼拝における応答を記した場面だろうと言われます。聖霊に導かれて教会が、あるいは礼拝を導くリーダーが「来てください」とまず叫ぶ。そしてそれを聞く会衆が、あるいは一人一人が、それに合わせて「来てください」と応答・唱和するのです。

そして 17 節後半が次のように続きます。「渇く者は来なさい。いのちの水が欲しい者は、ただで受けなさい。」こちらの「来なさい」は人々に向かっての言葉です。特に誰に向けての言葉でしょうか。信者への言葉でしょうか。それとも世の人々への言葉でしょうか。おそらく両方を含めて考えるのが良いのではないかと思います。「いのちの水が欲しい者は受けなさい」と言われていますが、クリスチャンは 1 回いのちの水を受ければ、あとは要らないというわけではありません。7 章 17 節では、やがての世界で子羊がご自身の民をいのちの水の泉に導かれるとありました。クリスチャンは

キリストにあるいのちを永遠に求め続けるという意味でいつも渇く者です。それは苦しみで特徴づけられる渇きではなく、喜びで特徴づけられる渇きです。キリストにある満たしを知って、もっと深く味わいたい、もっと豊かにそのいのちにあずかりたいと願って渇くのです。そういうクリスチャンへの招きの言葉として解せます。またこれはキリストのもとに来ていない人々に対する招きの言葉とも取ることができると思います。この世の歴史はまだ終わっていません。キリストは輝く明けの明星であり、完全な夜明けはまだ来ていません。わたしはすぐに来ると言っていますが、まだです。この猶予が与えられている間に、「渇く者は誰でも来なさい」と語るのです。人間は本来、神との交わりを通して真の満たしを覚える存在として造られました。私たちは神から離れた結果、他のもので（たとえば趣味や、スポーツや、お金や、名声や、快楽で）自分の心を満たそうとしますが、神以外のものでは真に私たちの魂の深いところまで満たすことはできません。その渇きを覚える人は誰でも来なさいと言われていきます。制限はありません。イエス様はヨハネの福音書 7 章 37～38 節でこう言われました。「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。」そしてこのいのちの水は、ただで受けることができると言われています。イザヤ書 55 章 1 節：「ああ、渇いている者はみな、水を求めて出て来るがよい。金のない者も。さあ、穀物を買って食べよ。さあ、金を払わないで、穀物を買え。代価を払わないで、ぶどう酒と乳を。」これはこのいのちの水の祝福が無償の恵みであることを示しています。もちろん本来ただではありません。しかしキリストがすでに代価を払ってくださいましたので、私たちは自分で払うことなく、ただキリストに感謝して、ただで受け取ることができるのです。教会はこの祝福へと人々を招くところでもあるということです。

主は「見よ、わたしはすぐに来る」と言われました。主が来られたら、人々の分離は決定的になります。ある人々は門を通過して都に入り、いのちの木から取って食べる幸いに生きますが、ある人々は外に出され、燃える火の池に投げ込まれます。主はこの黙示録の結びに当たって、わたしは御使いを遣わして、あなたがた全諸教会に証ししたと言っておられます。このイエス様のお言葉に聞く教会は、御霊に導かれて「来てください！」との声をまず上げるのです。主を待ち望む生活へ進みつつ、「来てください！」との祈りを熱心にささげるのです。と同時に「渇く者は来なさい」と教会内の人にも教会外の人に対しても、残された時間の限りアピールする。来週でこのヨハ

ネの黙示録を読み終わりますが、この書をここまで読んで来た者たちとして私たちも御霊に導かれて、この二つの言葉を自らの言葉として語る者へ導かれたいと思います。主を見上げて「主よ、来てください」と祈り、唱和する教会、また人々に向かって「渇く者は来なさい」「いのちの水が欲しい者はただで受けなさい。」 そのように語る教会の応答の歩みへ導かれたいと思います。